地域の絆を取り戻せ！
青森ねぶた祭の新しい魅力！

石塚達樹　梶田朱音　檜尾匡紀

慶應義塾大学大学院
健康マネジメント研究科
公衆衛生・スポーツ健康科学専攻

背景

■「青森ねぶた祭」は日本最大のお祭りの一つ
■ねぶたをはじめとする青森県の多くのお祭りが感染症の蔓延によって相次いで中止となった
■昨年度に引き続き、今年度も多くのお祭りは開催されなかった

青森ねぶた祭とは…

地域住民にとって…
・伝統であり、文化である。ねぶたは地域によって異なる形式があり、地元住民のアイデンティティに繋がっている。
・9割以上の子が運行に参加する地域でも最大級の祭り(2006大谷)
・青森の夏を楽しむための重要なイベントであり、生きがい、地域住民の繋がり作りの場でもある
・高齢者にとってはうつ病の予防などに繋がる可能性がある(2000大山)
・伝統文化の継承や地域の活性化に寄与すると考えている団体は、いずれも９割を超え、学校教育への高い期待感がもたれている(2009大谷)

青森県にとって…
・観光資源
・文化/芸術資源
・雇用創出の場
・収入を得る場

■「夏の楽しみ」の喪失
■生きがい/アイデンティティ喪失
■地元の繋がりの希薄化

開催できない
↓
まちづくり基盤の脆弱化

■観光収入の喪失
■観光に伴う雇用の喪失
■文化/芸術資源の喪失

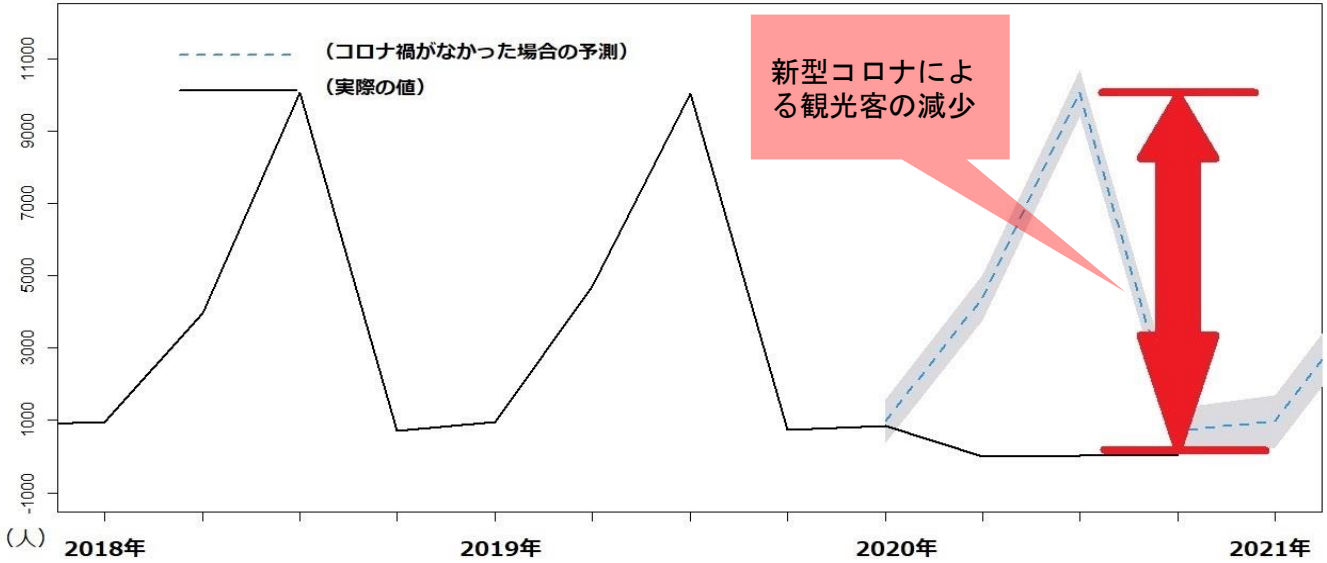
大谷良光他(2006),「青森ねぶた・弘前ねぷたへの子どもの関わりと意識--青森市・弘前市内小学校4年生を対象とした調査」, 弘前大学教育学部紀要(96), pp.51-60,
大谷良光他(2009),「ねぶた祭への高校生の観覧・参加状況と祭への意識（思い）調査：ハネト若者離れ問題を焦点として」, 弘前大学教育学部紀要(102), pp.105-114.
大山博史他(2000),「イベント型アクティビティ・ケアが高齢者のうつ症状に及ぼす効果--青森ねぶた祭りに参加した高齢者を対象として」, 高齢者のケアと行動科学/老年行動科学研究会編 7(1)p55-67

提案の目的

新型コロナウイルス感染症の流行によって生じた社会全体への影響をとりまとめ
コロナ後の社会を見通した新たな打ち手を提案し
将来のまちづくりの基盤の回復に寄与する

喪失を防ぐ → 取り戻す → 創出する

青森県における行祭事・イベントの観光客数推移（県内・県外・外国人含む）

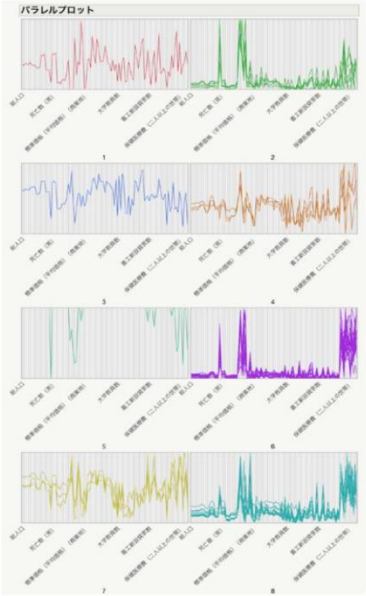


出典：国土交通省観光庁　共通基準による観光入込客統計

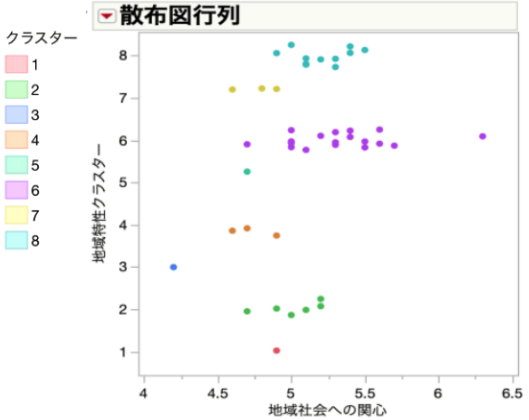
地域への関心と地方特性

SSDSE教育用データセットを使用し、各都道府県の統計情報をクラスター分析を行い、地域特性という変数として先ほどの調査に加え、地域への関心と地域特性にどのような関係があるのかについて検討した。

クラスター	度数	含まれる都道府県	各クラスターの平均値からみた特徴
1	1	北海道	総人口は比較的多いが、合計特殊出生率は2番目に低い。旅館営業施設数が最も多く、住宅地の価格は最も安い。気温は低く、降水量は少ない。小学校、中学校、高校数は2番目に多く、待機児童の数は少ない。住居費、光熱水道費が最も高い。
2	6	和歌山、長崎、熊本、宮崎、鹿児島、沖縄	総人口は2番目に少ない。合計特殊出生率は最も高い。気温が高く、降水日数、降水量は多い。平均でみると消費支出、光熱・水道費、教養娯楽費が最も少ない。
3	1	大阪	クラスター5(東京)に次いで総人口、各年齢人口、転入、転出の多い地域。交通・通信費が最も安い。
4	3	兵庫、福岡、千葉	光熱・水道費、家具家事用品費が少ないが、その他消費支出や食料費が高い。
5	1	東京	総人口、各年齢人口、転入、転出の最も多い地域であり、ほとんどの項目で最も高い水準にあたるクラスター。しかしながら、合計特殊出生率については最も低い。他の地域と比べ被覆及び履物費、保険医療費、教育費、教養娯楽費等が高い。居住費、光熱費、交通通信費は安い。
6	19	大分、佐賀、高知、愛媛、香川、徳島、山口、島根、鳥取、奈良、滋賀、山梨、福井、石川、富山、青森、岩手、秋田、山形	総人口、各年齢人口、転入、転出が最も少ない。合計特殊出生率は2番目に高い。交通・通信費は最も高く、家具・家事用品費も比較的高い。
7	3	埼玉、神奈川、愛知	転入者が2番目に多い。着工建築物床面積、新築持家数、家事・家具用品費が最も多い。
8	13	宮城、福島、茨城、栃木、群馬、新潟、長野、岐阜、静岡、三重、京都、岡山、広島	旅館営業施設が比較的多い。新築持家床面積は比較的広いが、住居費は安い。交通・通信費が高く、消費支出も比較的高い。



分類された各クラスターとその特徴

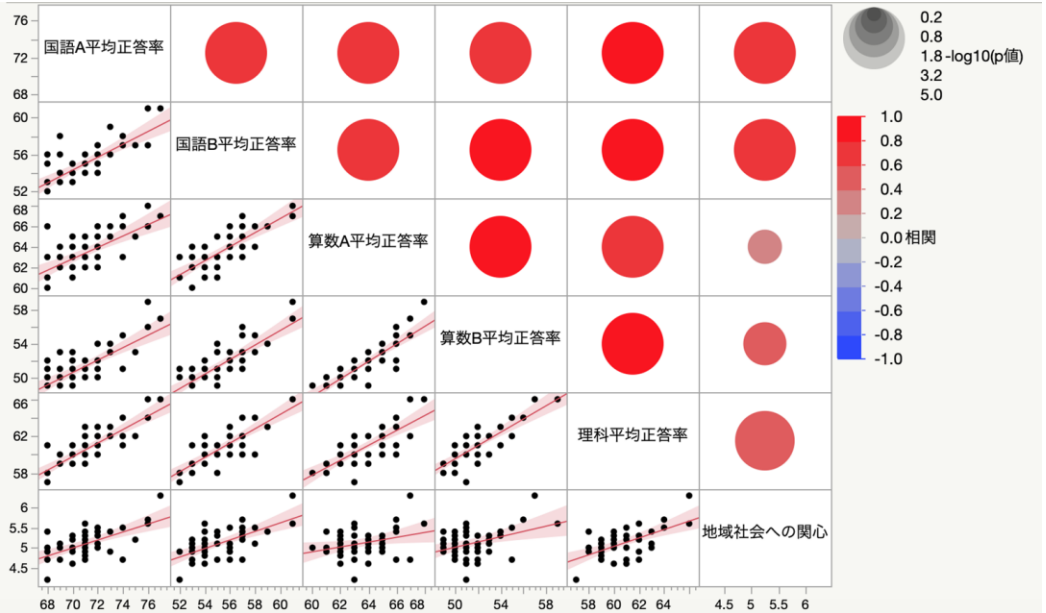


クラスター８、クラスター６の地域社会への関心が高い傾向にあった。それらの地域は都市部でもなく、ベットタウンでもない地域であった。青森県もクラスター６に含まれ、地域社会への関心が高い傾向にあった。
→都市部やベッドタウンなどでは関心は高くならない傾向があり、地域としての特色がある方が地域社会への関心は高まる傾向が地域特性クラスターと関心の散布図より読み取れる
→ねぶたも地域特有のお祭りであり、地域を特色づけるものである。地元の子供の地域社会への関心に一役かっていた可能性も否定できない。

出典：梶田・松山（2021）「教育における芸術の影響　How Art and Arts Can Influence Learning」

地域への関心と学校教育

小学生の全国学力調査の各都道府県教科別平均点数や学習に対する意識調査質問紙の結果について相関関係を解析。
＊今回使用した全国学力調査では小学生と中学生の成績の都市別データを比較した結果が大きく異なっていた。その要因について検討した結果、都市部の私立中学で全国学力調査を受験していないことによる変動の可能性が示唆され、選択バイアスの可能性を考慮し小学生のデータのみを利用した。

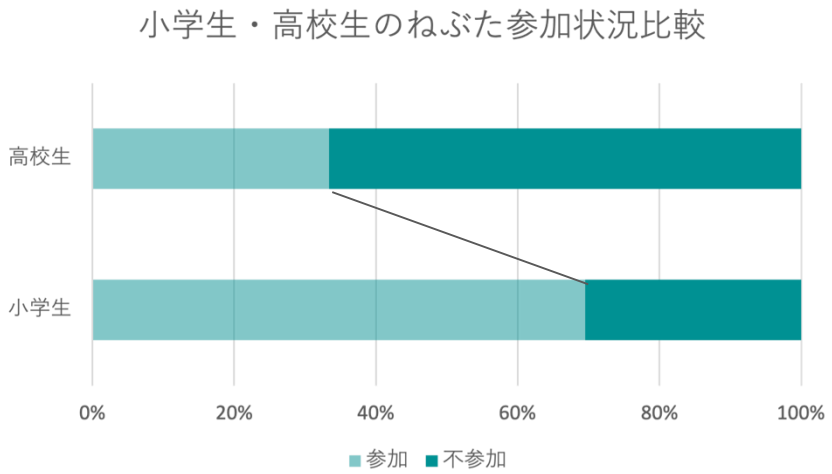


地域への関心と各科目の成績はどれも正の相関関係にあった。また、地域への関心が高い地域では国語と理科の成績が特に高くなる傾向が見られた。

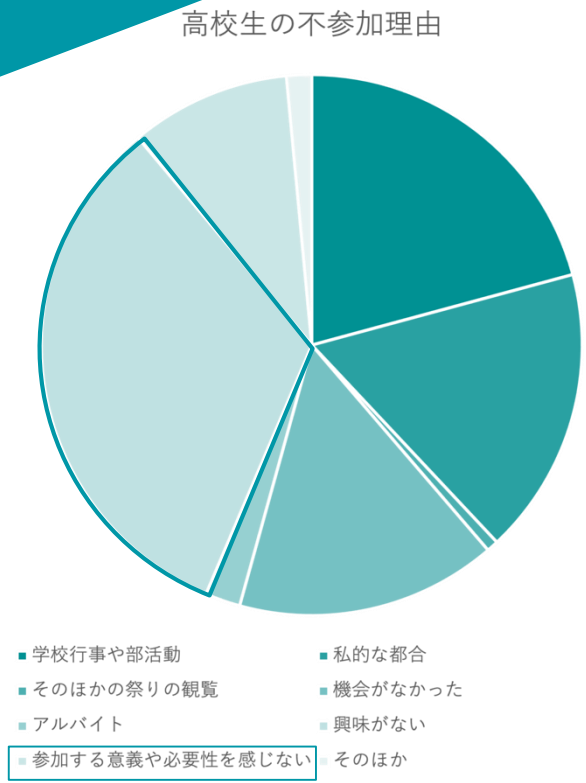
→学習や知識は同心円状に広がるため、地域社会への関心の有無という自身の身近な事柄に関心を持っているかどうかという部分が学力に影響を与えている可能性が考えられた。

ねぶたなどの地域のお祭りは自身の住む地域への関心の入り口になりうるものであり、学力に貢献していた可能性がある

若年層のねぶた参加状況



*小学生は青森市と弘前市の小学生を対象に2006年に行われた調査データをもとにグラフ作成
*高校生は青森市内の高校５校を対象に2007年に行われた調査データをもとにグラフ作成

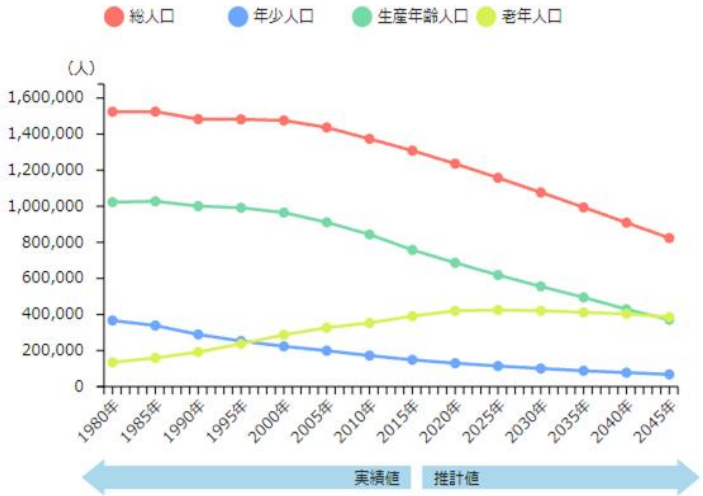


小学生から高校生に変わると参加が顕著に減少。高校生は不参加が半数以上を占めており、参加しなかった理由についても「興味がない」と回答している層が最も多い。
→高校生になると関心自体が低下してしまう

大谷良光他(2009),「ねぶた祭への高校生の観覧・参加状況と祭への意識（思い）調査：ハネト若者離れ問題を焦点として」, 弘前大学教育学部紀要(102), pp.105-114.
大谷良光他(2006),「青森ねぶた・弘前ねぶたへの子どもの関わりと意識--青森市・弘前市内小学校4年生を対象とした調査」, 弘前大学教育学部紀要(96), pp.51-60,

背景

青森県の人口推移と人口推計



青森県の総人口に占める年代の割合

年代（年）	2010	2020	2030	2040
年少人口	13% (+2%)	11% (+0%)	10% (-1%)	10% (-1%)
生産年齢人口	60% (+5%)	55% (+0%)	53% (-2%)	49% (-4%)
老年人口	27% (-7%)	34% (+0%)	37% (+3%)	41% (+7%)

＊括弧内は2020年度と比べた比率の増減を示す

成長につれて関心が薄れても、
幼い頃のお祭りの思い出は、大人になってから見直す地元の魅力ではないか？
しかし、青森県の総人口が今後急速に減り、
10年後、20年後のまちづくりを担う年少人口もまた減少している。

出典：総務省「国勢調査」、国立社会保障・人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口」

小括：ハイブリット開催に向けて

■青森ねぶた祭りの開催を続けることで、若い世代へ地域の魅力を伝えながら、地域の人々が繋いできた絆と文化を守る必要がある。

■流行状況によらず、地域住民のために現地開催できる形態を確保する。

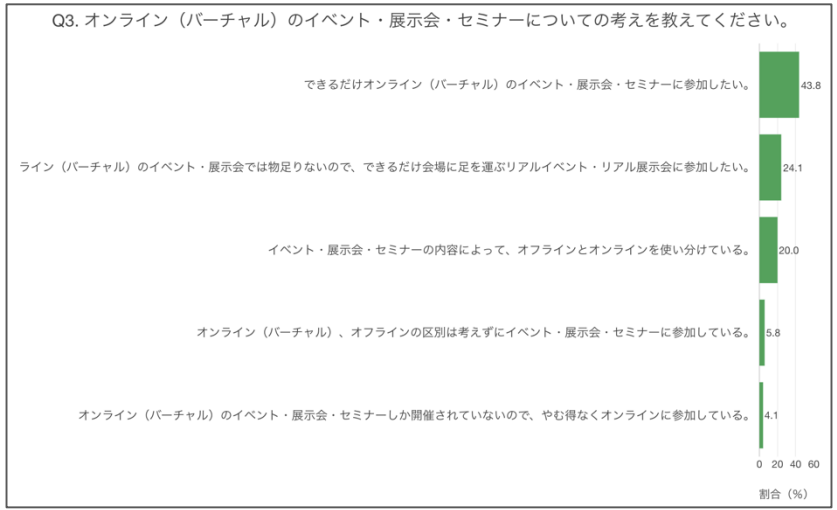
■オンライン参加枠を併用し、親和性が高い層へ訴求しながら、家族や仕事の事情、感染への不安で現地参加できない人も楽しめる形態をめざす。

	オンライン参加	現地参加
メリット	・安全 ・従来参加者で現地参加がしにくい人も参加可 ・新たな層へのアプローチができる	・開催と参加にそのものに地元にとっての価値がある ・コロナ下の開催であり、新たな参加者を得る機会となる
デメリット	・臨場感や経験の共有に限界がある。 ・コスト	・感染への不安から従来からの参加者も一定数は失われる ・経済優先という批判がある
戦略	・若年層はオンラインへの親和性が高いため、主なターゲットとする ・従来の参加者へは、オンラインでしかできない「特別な経験」を提供する。	地域の絆と伝統の維持を目指して、地元の人の参加を優先していくことで、開催の機運を高める。

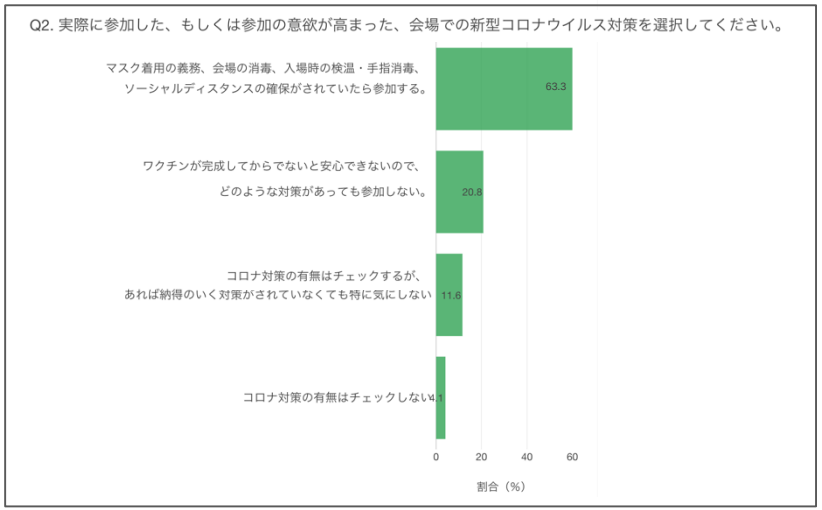
イベントの開催携帯と参加に対する意識調査

■オンラインイベントの希望者数は多くはないが、一定数の需要はある。
■しかし、本来参加したかったが参加できなかった人の割合を比較しながら調査結果を考察すると、参加意向はあるが、何らかの理由によってオンライン参加には障壁があることが考察される。
■オンライン開催の課題として、オンラインの良さを活かせず、新規性が示せていない可能性がある。

コロナ渦ではオンライン参加希望が４割、できる限りオフラインがいいもしくは仕方なくオンライン参加の人は３割ほど



コロナ禍でイベントに参加した人は、約６割が感染対策がされていた場合には参加する意向を示している



東京流通センター（2020）,「イベント・展示会・セミナーへの参加状況をコロナの前後で比較したアンケート調査（2020年11月6日）」, https://www.trc-event.jp/column/_693/, 2021年9月30日アクセス

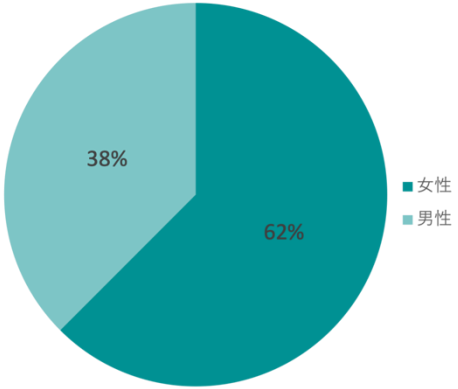
オンラインイベントにおける課題・利点の数量的抽出

方法

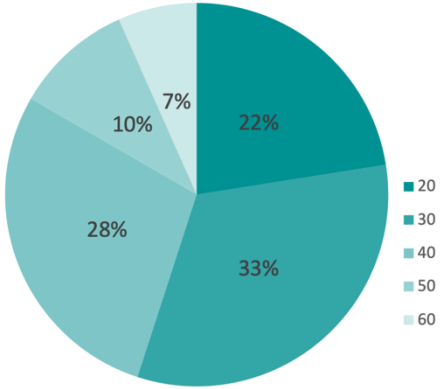
東京流通センターの実施した新型コロナウイルス感染症への変化したイベントへの意識調査アンケートより得られた自由記載コメントをKHcoderを用いて解析を行った。形態素はChazenによって分解し、未知語は取り除き、解析を行った。

アンケート実施方法	インターネットを用いて実施
調査時期	2020年11月6日
有効回答人数	120名

男女比率

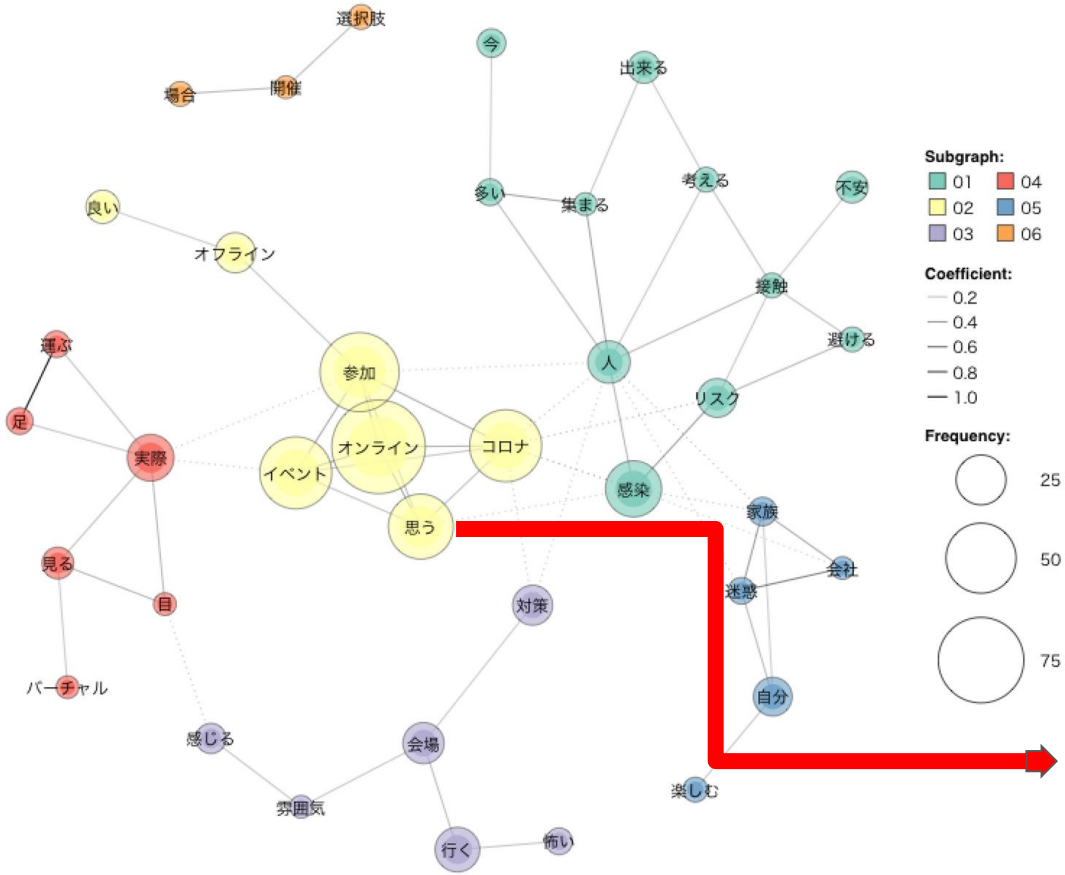


年齢分布



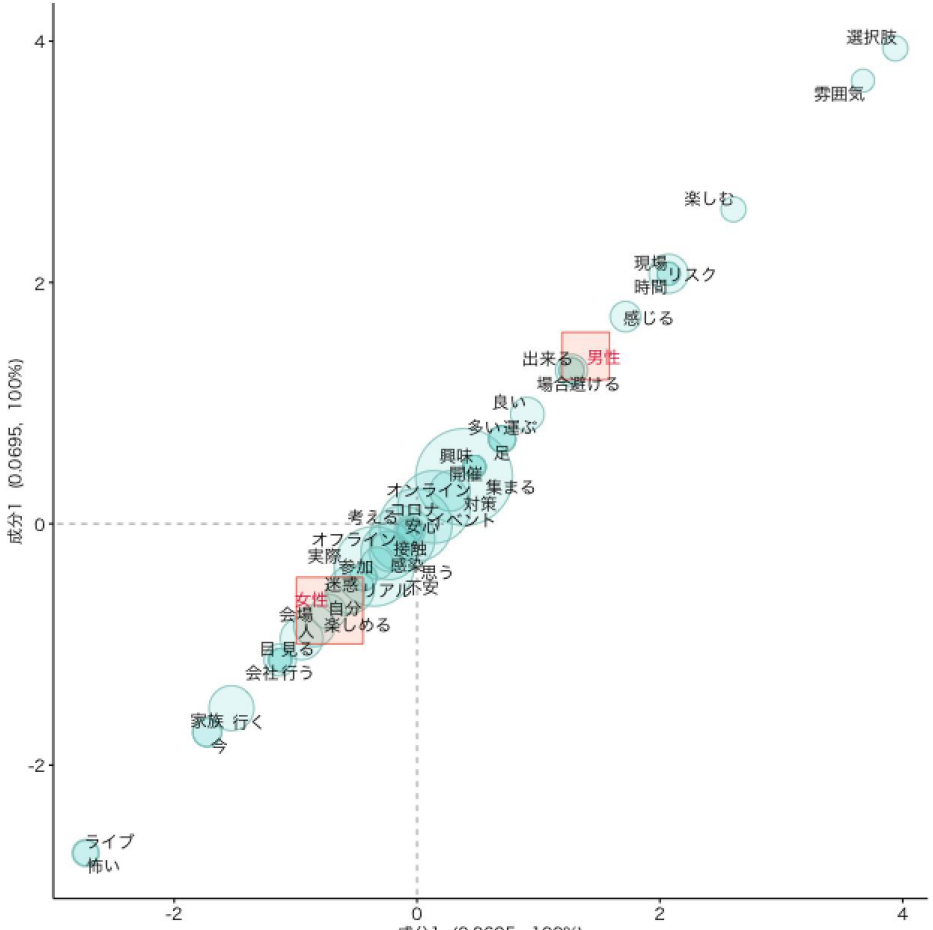
前掲の東京流通センター（2020）より自由記述記載コメント欄の提供をいただき解析を実施.

共起ネットワーク



■円の大きさが出現単語の頻度を示しており、オンラインイベントに対する考えを多くの人が述べている。
■黄02のバブル“思う”の内容を確認すると、オンラインイベントへの肯定的な意見17件、状況的に利用を肯定せざるを得ないとする意見10件、否定的な意見13件、その他3件で構成されており、全体的にみると感染症流行下では肯定的な意見が多くなった。
■また、実際に見るものと画面で見るものの違いについて言及する意見も見られ、イベントはやはりオフラインの方が良いとする意見も少数ではあるが見られた。
■次いで多かった青緑01の内容としては人が集まることや接触など感染リスクに関連する内容がみられ、個人レベルで感染リスクとなる要因が十分に認知されており、個人による対策がきちんと実施されている様子がうかがえた。

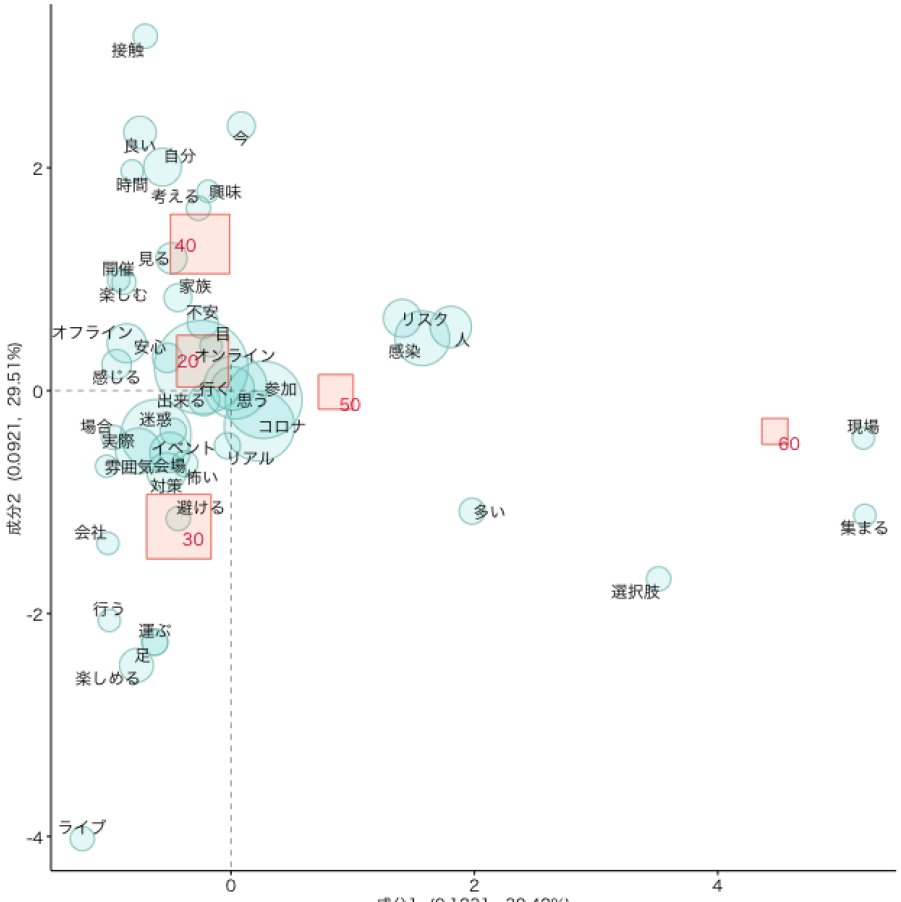
イベントへの意識、男女の違い



・女性は家族や周囲への配慮に関するコメントが多かった
・また、不安という単語は女性の近くに見られた
・男性は'避ける','出来る','場合'などの単語が近くに見られ、メリットやデメリットを考えて今ある選択肢から選択を行っている様子
・双方ともに見られた単語はオンライン開催への安心感や、対策がされていれば少しは安心を得られるという意見であった

女性は生存のために社会性を身につけており、周囲の迷惑を心配しており、個人の感情では動けず、共同体の安全を最も重視した判断をするような意思決定を行う可能性がある。

イベントへの意識、年齢による違い



■20代にはオンラインイベントに対して安心であるとして肯定的に捉える意見が多く、他の年代にも見られる単語が多かった。

■30代は’会社’,’避ける’などの単語が近くにあり、ウイルスを職場に持ち込むことの考慮が見られる。

■40代は’家族’,’見る’,’考える’などの単語が近くにあり、家族のことを考慮している可能性が考えられた。

■50代は近くに単語はあまり見られず、年代によって現れる特徴的な単語はなかった。

■60代には’現場’,’集まる’などの単語がみられた。

自由記載より考察したオンラインの課題・利点

利点

■参加者側の移動の時間や費用の削減

■それらに起因する参加へのハードルの低さ。

■感染症対策として効果的である。周囲への配慮も必要がなく、心から楽しめる。

課題

■年齢によってコロナウイルスをリスクと捉える割合や内容が異なるため、開催するイベントの対象者別の対応策が必要

・高齢の場合、オンラインイベントという選択肢はあまりない可能性が示唆された。また、50代60代の方々のコロナウイルス感染のリスクや影響は大きいこともあり、現場での対策を徹底して行うこと、どのような対策を行っているかの情報の周知や無症状感染者の可能性を考慮した参加者への感染対策協力も必要である

・20代などの若者対象イベントであればオンラインで楽しめる提案も選択肢にあるため、オンラインコンテンツは若者を意識したものを用意する

・全体としてやはり目で見たり体験したりすることとオンラインは異なるので、イベントの特性によって需要が異なり、コンテンツを分ける必要がありそう

まちづくり基盤としてのお祭り開催の方向性

- 比較的若い人（20代～）はお祭り無関心層が多いが、オンラインコンテンツには親和性がたかいことがわかったため、若者ｘオンラインで将来のまちづくり基盤と旅行需要につなげていく。
- ねぶたのより深い価値観や地元の若者に特化したコンテンツを見せていく。
- インフルエンサーは身近な存在として地位を確立しており、地元の若者でお祭りを通じたインフルエンサー創出により、県内外の若者参加者増加につなげる。
- SNSを通して、インフルエンサー活動をする若者もお祭りを通じて輝くことで、より地元に愛着を持つ。
- 地元への関心や愛着の形成により、短期的には地域社会への関心を高め、長期的には将来的なUターン、人口流出の低減につなげられる。

現地開催パート：コロナ禍における地域住民のための開催

十万人単位が密集するイベントの開催は障壁が高い。
参加者の管理が行えるよう、縮小開催を検討する。

■地域住民のための祭りの開催を主目的とする。

■厳しい開催要件・流行を想定し、どのような状況でも開催できる形態も考えておき、中止を避けられるよう地域での合意を得ていく。

~外部環境~

1. 新型コロナ流行により常に中止の危機がある
2. 行動制限と緩和の要件が未知数である
3. 他の競合イベントがコロナ禍で魅力を高める可能性がある

~制約条件~

・地域における合意形成が必要

・地域の保健医療システムの負担への配慮が必要

~国・県のガイドライン~

・緊急事態宣言でなければ
収容人数の50%または1万人以下
大規模な移動を伴うイベントは県と協議が必要

・状況次第でより厳しい制限で中止要請もありえる

～グローバルスタンダード～

東京オリンピック2020を参考に

・ワクチン接種　＋　PCR陰性

・非接種の場合：PCR陰性
→いずれかの確認で大規模イベントが行われつつある

オンライン参加：「初公開！ ”ねぶたオンライン”コース」

準備～祭り当日～その後までを併走して、新たな視点で楽しめるオンラインコンテンツ

■祭りは準備が一番楽しい？裏側をオンラインで体験しよう
- 普段は見れない準備の裏側、SNSで限定配信していきます！
- ハネト, ねぶた師, 運行団体, ミスねぶた, 運営スタッフ、、、
  →自分だけの「推し」を見つけましょう！

■家でも臨場感を味わおう
- Everybody “Haneto” Now –AIによるハネト体験-
- ハネトやねぶたがカメラを装着：初めてのアングルを放送
- ねぶたの見どころと裏側を、ねぶた専門家が解説します
- 家で夏祭りセット：特産品お届け。家で夏祭りを楽しもう！

■オンラインならではのスペシャルコンテンツ
- 優秀ねぶた審査、ミスねぶた審査など、現地参加では観覧が限られていた部分をお伝えしていきます。
- ねぶたが役割を終えるまでを初公開！長く短い夏の終わりを一緒に過ごしましょう。

スマホでチェック！10代から重鎮まで、各年代が配信するので気軽にいいね・質問・コメントできます。

・「今日のねぶた、スマホで見れるって」という新しい観覧の方法を作ります。
・常連と地元向けには、見所を熟知した地元のラジオDJが実況中継！ねぶた師と弘前大学教授が解説し、新たな視点で楽しめます。

AI合成によるハネト・バーチャル体験！

ミニ七輪セットでねぶたを見ながら、家族で安全に夏祭りを楽めます。

以下のスライドの写真出典：　旅東北https://www.tohokukanko.jp/index.html　（一部は作者取材）

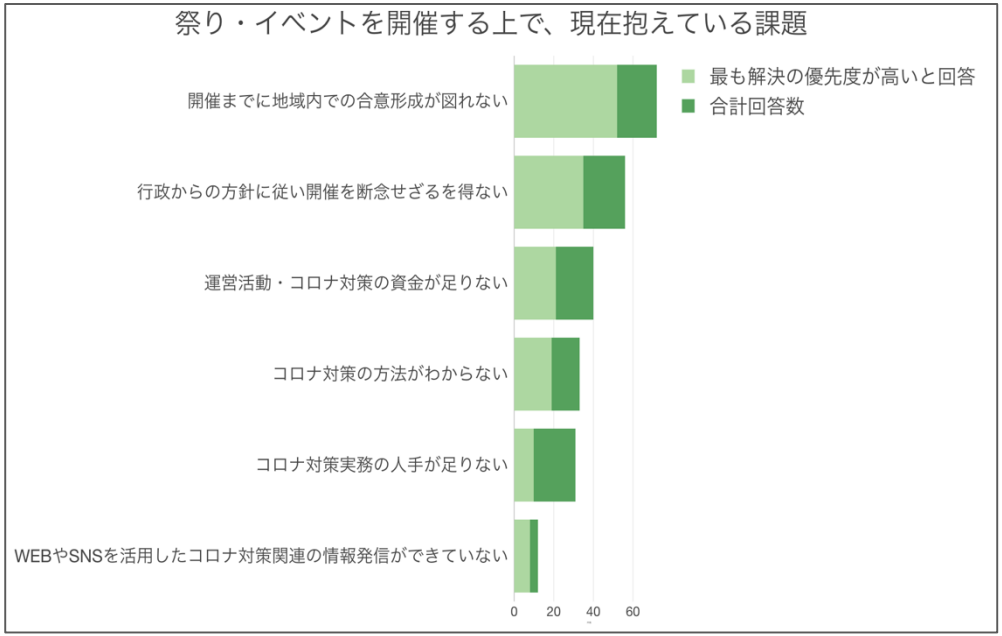
もう一つの課題：「地域における合意形成」

「地域の合意形成」

多様なステークホルダー間で判断を迫られる
祭り・イベント主催者への調査の結果
最も優先度の高い課題であった.

祭りで生まれるものが、未来のまちづくりにとって大切という認識を保ち、実行可能な開催方法を模索していくことが最も重要な課題といえる。

感染症流行で地方に関心が集まるいま、デジタル技術も駆使した取り組みが地域内外の人の関心を引きつけるために必要である。



2021年1月21日～2月5日、イベント・お祭り関係者125名の調査結果

オマツリジャパン（株）「コロナ禍における祭り・イベント関係者の動向・意識調査 （2021年2月18日)」
https://omatsurijapan.com/news/matsuri-souken/, 2021年9月30日アクセス

まとめ

「青森ねぶた祭」のハイブリッド開催によって、
積み重ねてきた地域の絆と文化・芸術を新しい世代へつなぎ、
パンデミックのさらに先にあるまちづくりに繋いでいく

喪失を防ぐ → 取り戻す → 創出する

関心
制限下参加
→ 参加 →
□□地域の絆と伝統
□□先駆的な観光
□□新たな世代に地域の魅力をひきつぐ

制限下の縮小開催
オンライン併用

通常開催
オンラインの磨き上げ

新時代の
「新しい祭」